

皇學館大学研究開発推進センター紀要 第1号  
平成27年3月25日発行（抜刷）

# 皇學館大学附属図書館小史

吉 崎 久

# 皇學館大学附属図書館小史

吉 崎 久

## 1、神宮文庫内に図書館設置

大学開設にともない、その申請上、図書館の設置は必須の条件とされていたが、大学諸施設の整備計画が当初の予定通り進捗をみなかったため、皇學館後援会ではかねてより神宮文庫の一部を大学附属図書館として借用したき旨、神宮大宮司宛に願い出していたところ、神宮当局の格別の配慮により、昭和36年9月21日付をもって次の承諾書が手渡された。

### 神宮文庫使用承諾書

学校法人皇學館大学設置許可ありたる上は、該大学の図書館として、当神宮所有の左記建物その他を同大学において使用することを承諾します。

記

一、伊勢市神田久志本町1711番地 所在

神宮文庫

(イ) 書庫	鉄筋コンクリート4階建	延140坪
(ロ) 書庫	同 2階建	延 70坪
(ハ) 事務室・閲覧室	鉄筋コンクリート平屋建	延168坪
(ニ) 小使室	木造瓦葺平屋建	18坪

昭和36年9月21日

伊勢市宇治浦田町151番地

神宮大宮司 坊城 俊良

財団法人皇學館後援会

会長 吉田 茂殿

ただし、この件については、同日付で神宮当局より皇學館後援会会長宛に、この承諾書は、あくまでも大学図書館設置までの期間における形式上の措置であり、実際にあたっては建物及び内部施設など一切の維持・管理は従前通り神宮において行うことには変わりなく、又、別途貸与するものを除く図書類の閲覧及び貸付けに関しては、神宮文庫図書閲覧及び貸付規程を適用することを条件としている旨の申し入れがあり、皇學館後援会としても、折り返しそれを誓約の旨、回答した。

その後、皇學館大学設置の認可があり、いよいよ大学開設の運びとなったので、神宮文庫一部借用については、5月17日、外宮において神宮側からは櫻井勝之進庶務課長、神宮文庫奥野吉郎主事、西川元泰主任と大学側からは初代図書館長田中卓、武久朝男課員とにおいて打合せを行い、附属図書館建設までを条件に、長谷理事長より神宮大宮司に宛て、5月21日付をもって左のごとく許可願いを提出した。

記

一、借用建物 伊勢市神田久志本町所在

神宮文庫の内

書庫一室 事務室2室（別紙図面）

一、借用期間 昭和37年4月23日より本学附属図書館建設まで

（完成見込 昭和41年度末）

神宮文庫敷地建物坪数

住所 伊勢市神田久志本町字赤井1711番地

敷地 14反5畝11歩（4,361坪）14,413,105㎡

建物 建築年大正14年

書庫	4階延	各階40坪	160坪	535.28㎡
新書庫	3階延	各階44坪	132坪	396.9
小使室及び廊下			19坪	62.7
閲覧室・事務室・その他			101坪43	3,352,261
延建物面積			345坪43	1,329,406

大学使用

新書庫 1・2階 88坪 290.4㎡

事務室 4坪 13.2

教員閲覧室・館長室 4坪 13.2

閲覧室 24坪 79.2

120坪

これについても神宮当局の特別の計らいにより、6月27日付をもって許可せられ、特に使用許可期限と使用許可の条件については誓約書を取り交わした。

このように神宮当局の非常な好意をもって、大学開設と同時に神宮文庫の一部を借用し、旧神宮皇學館の図書32,858冊、学術雑誌11,263冊の蔵書を基本として、更に約200万円の予算で、新たに購入予定の図書と、アジア財団より寄贈を受けた1,811冊の図書を合わせて、大学図書館が発足した。なお旧神宮皇學館大学当時の蔵書は、昭和21年3月廃学当時に国立大学である名古屋大学に接收せられ、その後、返還交渉を行ったが、遂に目的を達し得ずに今日に及んでいる。

また第一年度の購入図書費は50万円であった。

開学とともに図書館開設事務は、5月9日着任の武久課員が担当し、初代館長田中卓教授が、館員2名を指揮して草創の業務を処理した。6月1日、図書館蔵所用の角印を調製、これより事務が軌道にのった。その後、6月27日付で文庫の一部使用について正式の許可が出されたので、7月10日旧神宮皇學館本を旧書庫から新書庫に移転した。その後、9月末に学生図書委員を国文・国史両学科よりそれぞれ4名を選任し、図書館員を助けて、学生の閲覧の便宜を図ることを任務とした。

図書館創設の基礎がほぼできあがった第一年度の末、館長の田中教授は、当時、新しく発足した日本教師会（昭和38年2月3日結成）の会長に選任されたため、任期（2年）途中であったが、昭和38年3月末日をもって図書館長を西内雅教授と交替した。

第2代図書館長西内教授は、その業務を継承しつつ、意欲的に工夫改善につとめた。しかし西内教授は翌39年3月に大学を退職し、その残任期間は西宮一民教授が第3代図書館長に就任した。その時館員は3名に増員された。昭和40年1月、佐藤通次教授が第4代の図書館長にせられたが、このころ業務の増大に伴って館員は4名となった。佐藤館長任期を満了による辞任のあとをうけて、昭和42年1月、谷省吾教授が第5代の図書館長に就任した。

その間において、昭和41年7月には神宮文庫の書庫増改築が着工されたため、本学附属図書館は一時大学本館内の教室に移転し、ここで図書館業務を続行したが、42年3月、工事が完了するに及んで、元のとおり神宮文庫で開館し、その後引き続いて今日まで順調に業務を行っている。

『皇學館大学附属図書館規定』ならびに『皇學館大学図書閲覧及び貸し出し規定』は、開設早々に制定され、これにもとづいて図書の受入れ、整理、閲覧などの業務を進めてきたが、10年の間には蔵書の冊数・内容ともに次第に充実し、学生の利用も年を追って増加を示している。

殊に国文・国史・神道の分野においては、神宮皇學館大学廃学より皇學館大学再興までの期間の空白を既に充填しえたばかりではなく、その後の新刊書も含めて、かなりの程度に整備されてきた。その上、開設当初より、神宮文庫の利用について、特別の便宜を供与されているので、教員及び学生の専門的研究の上では、独自の体制に恵まれていると言えるであろう。

### 図書館建設の願い

ただ、大学図書館としての機能を発揮するためには、設備の点でもとより十分とは言い難く、新しい図書館の建設が待望されていた。昭和38年11月18日、西内雅図書館長より図書館建築の話があり、館長より12月4日（水）に設計図の案が提示され検討がなされた。昭和40年11月24日、その設計図が谷図書館長に引き継がれた。しかしながら、昭和41年度末完成見込みの附属図書館は、種々の事情で予定通り進捗するに至らなかった。昭和41年3月28日、神宮より神宮文庫の書庫3階を増改築の計画が伝えられ、6月17日佐藤図書館長は図書の移転を7月7日から9日までの3日間で実施することになった。大学の本館であった1号館の203教室を書庫兼事務室とし、10月24日より閲覧業務を行った。神宮文庫の書庫3階の工事完了に合わせて、順次移転作業を始め、昭和42年4月神宮文庫内で平常通り開館を始めた。昭和42年8月29日、谷図書館長に図書館関係資料を提出し、それらの資料をもとに改めて昭和43年図書館建築の構想が立てられた。

しかしながら、それも実現を見ず神宮当局に多大の迷惑をかけながら、1年毎の契約更新を重ねて今日に至り、ようやく10周年を迎えて、昭和47年度末には附属図書館を新築しうる段階となった。

### 学生研究室図書

昭和37年7月16日学生控え室に図書を配架し、その閲覧事項について掲示を行った。昭和38年3月26日、久保田文学部長より学生研究室に配架する図書（予算10万円）の選書リストの提出が要請され、3月28日に図書委員会を開催し検討された。同年5月22日、学生研究室に備付けられていた図書を図書館へ移すことになり、その図書の管理を学生の図書委員に委ねることになった。昭和39年5月6日の図書委員会で、学生研究室の図書の冊数を現状で留めることで決定された。6月4日には、学生図書委員が解散された。

## 2、昭和48年新図書館竣工

昭和47年9月27日、剣道場において附属図書館の地鎮祭を執行。昭和48年10月1日、附属図書館の開館式を迎えた。当時図書館長であった谷省吾教授は、『館友』第111号に「図書館竣工報告」の記事を載せている。それによると、

幸ひ創立九十年・再興十年を迎へた昨47年、事情は急転した。このことについて最も奔走されたのは岸総長であるが、その熱意に応へて万般の御協力をいただいたのは松下電機産業株式会社（会長松下幸之助氏）であつて、全く深謝にたへない次第である。9月29日に地鎮祭があり、直ちに着工して6ヶ月、本年（注：昭和48年）4月5日に竣工祭を行った。建築の担当は鹿島建設株式会社である。

敷地は、神宮文庫との連絡を考へて、同文庫に隣接したところが選ばれたが、同地は、将来本館・講堂を建設する予定の、いはゆる大学本丸の一劃である。鉄筋コンクリート二階建、一階595,551㎡、二階585,428㎡であるから、大学図書館としては必ずしも大きいものではないが、それぞれの部門はかへつてゆつたりとして使ひ易く、本学の規模にふさはしい設計になつてゐる。書庫内の三層の書架と閲覧室内の開架書架とに約15万冊を収容することができ、閲覧室は一般用が120席、大学院用が12席、教員用が14席、空調は完備してゐるのでまことに快調である。

新しい図書館は、湿度の状態を考慮して今秋書物を移転し、移転を終つた時点で開館の予定であるが、完成の暁には、これまで以上に本学の研究・教育の中核としての機能を發揮するにちがひない。（中略）再興当初、旧神宮皇學館本と新規購入図書とを併せて約4万4千冊で発足した本学図書館は、その後の努力により、廃学から再興までの空白をほぼ充填し、さらに新刊書を含めて、特に国文・国史・神道の分野においては相当の程度に充実しえたと言へるであらう。現在約6万8千冊を数へる。

図書館は大いに利用されねばならない。本学及び神宮関係はもとよりのこと、ひろく全国の研究者にも扉は開かれてゐる。館友諸賢の積極的な御利用をも期待してやまぬものがある。

開学以来、神宮の特別のご好意により元皇學館本を拝借して利用に提供してきたが、念願の附属図書館を建設するに伴い、昭和47年11月7日井野碩哉理事長から徳川宗敬神宮大宮司に宛てて、元皇學館本譲渡の願いが提出された。12月2日付官収第九五号で神宮文庫に必要と認められるもの若干部を除くとの条件のもと譲渡が認められた。昭和48年3月末で、谷省吾教授が、図書館長の役職を退かれ、新たに4月から図書館長に藤本利治教授が就任し、4月5日附属図書館の竣工式を行った。図書館では、元皇學館本の譲渡に伴う、図書目録の作成作業を進める一方、附属図書館への引越し作業を進め、9月末日まで作業は続けられた。

面積	1階	597,153㎡
	2階	587,853㎡
総面積		1185,006㎡

1階	館長室	27,500		8.32坪
	教員閲覧室	48,750	14席	14.75
	会議室	37,500	14席	11.34
	事務室	75,000	10席	22.69

書庫	161,250		
その他	247,153		
合計	597,153		

2階	一般閲覧室	225,000	120席	68.06
	大学院閲覧室	37,500	12席	11.34
	書庫	161,250		
	その他	164,103		
	合計	587,853		

書庫	1階	161,250		48.78
	2階	161,250		48.78
	3階	161,250		48.78
	合計	483,750		146.34

図書館の開館を記念して、2階の閲覧室で「御神符展」を開催した。度会郡古和浦で俵の中から発見されたという御札173点を上村芳夫氏のご厚意により12月3日（月）から8日（土）まで展示を行った。

展示の詳細は、不明であるが目録によって展示された資料の概要が知られる。上村氏は、資料を大神宮関係、お札さん、船玉さん、お守りさん、絵像（神像・仏像）、文字札、その他、特別展示（古和浦文書など）に分類しておりその中から選択して展示を行った。旧神宮皇學館図書については、昭和49年9月に15,650冊を譲渡され、残り28,000冊余については「神宮文庫所蔵元神宮皇學館本譲渡問題に関する審議会」から平成4年3月に「神宮文庫にとっては、すべて弧本というべき貴重なものである」「神宮文庫が皇學館大学から歩いて数分の位置にあることをも考えれば、敢えて譲渡を考慮する必要はない」と白米図書館長にあて通知がなされた。しかし、旧神宮皇學館図書には、上田万年文庫が含まれている。上田万年先生は、大正8年6月26日に東京帝国大学教授から第8代館長として着任された。チャンバリン（イギリスの日本学者で明治6年来日、東京大学の言語学・国語学教師）の蔵書も含まれている貴重な蔵書が多く、これらの蔵書を譲渡されなかったのは本学にとって大きな痛手である。

### 久保田収・北岡四良・澤瀉久孝の3文庫目録作成

久保田収教授は、昭和36年7月大學設立準備委員、昭和37年再興されると同時に教授に就任され、国史学科主任、文学部長、神道研究所長、出版部長などを歴任された。久保田教授の蔵書を久保田収文庫とする経緯については、当時の図書館長藤本利治教授が目録の序文に次のように書いておられる。「久保田収先生が御逝去されたのは昭和51年12月7日のことであった。（中略）御遺族から大学に先生の御愛蔵の図書の寄贈の申し出があったのはその後、間もなくのことであった。大学ではその御好意をありがたく頂戴し「久保田収文庫」として図書館で保管し利用に供することになった。（中略）久保田文庫に収録された寄贈図書は3,721冊で、先生御専攻の神道史から、仏教・通史・地方史・歌集・評論まで広汎な分野にわたり、先生の学問領域の広さに改めて敬服するものである。」（昭和57年3月）

北岡四良教授は、昭和38年教務課長兼高等学校主事、昭和39年講師に就任され、後短期大学教学部長、大學の国文学科主任を歴任された。北岡教授の蔵書を北岡四良文庫とする経緯については、館長

藤本利治教授が目録の序文に次のように書いておられる。「北岡四良先生が逝かれたのは昭和52年6月10日であった。（中略）御遺族から大学に先生御愛蔵の図書1,282冊の寄贈の申し出があったのはその直後のことであった。（中略）先生の御研究は郷里である志摩地方はもちろん、南勢・伊賀・牟婁と三重県全域に及ぶ方言調査から、国語学史に至るまで国語学の全分野にわたっておられた。このほか郷土の国文学者谷川士清や郷土史に及ぶという広汎なものであった。さらに鳥羽の郷土史会役員として、志摩地方の地誌・民俗・歴史などを調査発掘され発表されてきた。国語学研究者だけでなく、国語学・郷土史の研究者の受ける学恩はまことに大きいことであろう。」（昭和57年3月）

澤瀉久孝教授は、本学の再興に尽力され、昭和37年から兼任教授として教育にあたられてきた。澤瀉教授の蔵書を、澤瀉久孝文庫とする経緯については、館長藤本利治教授が目録の序文に次のように書いておられる。「澤瀉久孝先生と本学の御縁は昭和37年本学が再興されるときに始まるのであるが、その際国文学科の生みの親は先生だったと伺っている。以来御逝去まで兼任教授として萬葉の心を学生に講義していただいたのである。澤瀉先生の蔵書が本学に寄贈されることになったのは、先生の御遺志とともに、先生が伊勢市の御出身であり、この地に永眠されていることから本学が最もふさわしいという御婦人の優しいお気持ちからであった。御婦人から野間光辰教授を通じて当時の館長西宮一民教授に蔵書寄贈の申し出があったのは昭和50年春のことであった。（中略）澤瀉久孝文庫に収録されている図書は6,773冊で、洋装本だけではなく多くの和装本もあり、なかには貴重な稀覯本も含まれており、先生の御研究領域の広さと深さが知られる。和装本では国書・漢籍・仏典に、洋装本では萬葉集関係を中心に国文学の各分野に及んでいる。これら先生の御苦心の収集による図書によって、後学の利用者は広大な学恩をうけられるであろう。」（昭和57年3月）

澤瀉久孝文庫の内、萬葉集を中心とした和装本について帙を作成し保護を図った。その題箋を当時本学の書道の田畑昭典教授に依頼し、御揮毫頂いた。（「大学図書館の近況」館長宗林正人教授、「全学一体」68号昭和63年10月）

昭和58年坂本夏男教授からエール大学に所蔵されている『スチムソン日記』（1909年から1945年までの37年間）のマイクロフィルムが寄贈された。スチムソン（1867-1950）は、米国の著名な政治家である。彼は、フーヴァー大統領のもとで国務長官をつとめ、ロンドン海軍軍縮会議では米国の首席全権として活躍し、満州事変の際は対日強硬論を唱えた。ローズヴェルト政権下では、陸軍長官の職にあつて、日米開戦前の対日政策の枢機に参画し、また開戦後は原子爆弾の製造と使用を推進した。因みに、当時国立国会図書館にも所蔵されていない貴重な資料である、として「全学一体」第40号（昭和58年3月）に紹介された。

### 3、昭和59年積層書庫（5層）竣工

創立百周年記念事業の一環として、書庫棟の増築工事を計画に入れた。昭和58年7月から増築工事が始まり、翌59年3月24日に竣工式を行った。鉄筋平屋建ての外観であるが、内部は5層の書庫になっており、その床面積は1539平方メートルである。空調設備を整えた構造で、約30万冊の収容能力をもっている。現在の全蔵書冊数は、151,174冊で購読雑誌数は169点である。

#### 複写サービスの実施

複写サービスは、開館当時図書館内に設置されて出版部の担当者によって複写を行っていた。利用者は、コピーの申込書と資料を提出しコピーを受け取るというシステムであった。

昭和57年9月24日より、利用者が自由に利用できるようコピー機をコイン式とした。

平成元年2月から複写の枚数が大幅に増加したため3台にしたが、それでも対応できず平成2年3月には1台増設して4台の複写機を設置した。コピー代金も昭和62年11月から1枚20円に、63年10月には10円に値下げしたことも複写機の使用枚数が増加した原因ともなった。

## 蔵書目録の作成

昭和60年4月、蔵書冊数が14万冊に達し、所蔵資料の検索、蔵書構成の把握および図書館間の相互協力などのため蔵書目録作成の希望が出された。坂本夏男図書館長は、田中卓学長の要請を容れ、澤瀉久孝・久保田収・北岡四良の3文庫については、冊子体目録として既に刊行しているので、これらを除いた（大学本・短期大学本・旧神宮皇學館本・洋書）目録作成を手掛けられた。『皇學館大学附属図書館 蔵書目録』（昭和59年3月末現在）が完成したのは、企画が立てられてから2年後の昭和62年3月のことであった。B5版1,265頁にのぼる大部のものとなった。印刷は、京都市南区吉祥院の内外印刷株式会社に依頼した。

平成元年には、昭和54年に雑誌目録を作成してから10年を経過し、今回は学術雑誌に限定せず本学に所蔵する総ての雑誌を掲載した（和雑誌1,959点、洋雑誌38点）。雑誌の誌名順に配列し、発行所による一覧は、カウンターにプリントアウトしたものを用意した。

## 大学図書館の電算化への歩み

昭和60年頃、マイクロコンピュータ（以下「マイコン」と略称）を用いて、図書館業務の電算化推進に向けて積極的に検討がなされていた時期であった。丁度その折、國學院栃木短期大学の片山喜八郎図書館長がリードレックス社のデータボックスを利用した図書館業務の機械化を推進してこられたことは、図書館界でもよく知られていた。昭和60年7月27日・29日・30日（月・火）片山先生を講師に「マイコンによる図書館業務」講習会が開催され、本学でも導入について検討すべく図書館から参加した。講習会をふまえて導入を決定したのはその直後であった。図書館では、従来の手書きカードから、マイコンを用いてデータ作成を開始した。カード目録の厚みを持ったカードへの出力は出来なかった。そこで、図書カード専用のコピー機を導入し、普通紙からカード目録専用紙へコピーを行い、カードの配架を行った。ローマ字が、読みづらいとの学生からの要望があり、昭和63年5月9日から図書目録カードの読みを「かな表記」に改めた。データボックスを用いたデータ作成の成果は、『荒川久寿男教授旧蔵書目録』（昭和63年3月15日）・『皇學館大学附属図書館雑誌目録』（平成元年5月31日）・『三木正太郎教授旧蔵書目録』（平成2年1月15日）と相次いで冊子目録として刊行した。

平成元年1月27日、図書館業務の機械化導入に向けての依頼を谷口理事に行った。その結果、7月24日から皇學館高校によりバーコード貼付作業が行われ、引続き8月1日から中学生によるバーコード貼付作業が継続して行われた。平成2年12月17日、理事長に電算システムの仮契約書を丸善株式会社と締結の起案書をあげ、平成3年3月28日 図書館システムの契約が取り交わされた。本学における図書館業務の電算化の第一歩を踏み出すこととなった。

## 図書館増築計画が浮上

昭和63年7月8日から15日まで図書館の改造工事を行い、閲覧室から直接書庫へ入れるようにし、使用頻度が高いと考えられる図書約40,000冊を選び、10月3日より開架式閲覧方式に切り替えた。翌年2月25日から3月4日まで、更に開架の冊数を大幅に増やすために図書の移動作業を行う。4月17

日より旧書庫3層、新書庫3－5層を開架とした。平成元年9月9日から利用者の要望に応え、午後8時まで開館延長を実施するために山下君夫氏を採用した。

平成3年1月7日、理事長に閲覧室が手狭となったこと、閲覧機の一人あたりのスペースが狭いこと、エレベータの設置の必要性を説明。2月12日図書館長より、理事長の談話として、新5カ年計画に大学院の教室を建築する計画はあるが、図書館の建築は計画に入っていない。大学院の教室を無視して図書館の建築を行うことは大義名分が立たない。しかし、図書館の一角に大学院の教室を設けることで、22日の学内理事会に計画案を提出することが伝えられた。3月27日理事会・評議委員会に図書館増築計画が提案され、3月28日、鹿島建設株式会社と打合せを行う。

平成4年8月末、昭和48年に建設した図書館を取り壊し8月31日（月）地鎮祭が執り行われた。地鎮祭には、水谷光男伊勢市長、吉田正路伊勢商工会議所会頭、さらに篠田康雄総長を始めとする本学関係者の他工事関係者約30名が参列。本澤雅史講師が斎主となり、厳粛のうちに執り行われた。（完成は平成5年6月予定）昭和59年に増築した書庫棟はそのまま残し、新しく建てられる図書館は、鉄筋コンクリート3階建てで、延べ床面積は約2,923平方メートル、1階は書庫、2階は開架式の書架と閲覧席、3階は書架と閲覧席のほかに大学院の教室と研究室が設けられる。書物の収容能力は38万6千冊に増え、閲覧席も144席から220席に増やされる。コンピュータによる図書のデータの登録や検索システムをさらに進め、各研究機関とのデータベースを利用できるよう整備していくことになった。工事期間中は、書庫棟西隣にプレハブの仮設図書館を建て従来通りに出来るようにしてあり、仮設事務所へは7月20日から移動を行い、22日まで日通が作業を行い、8月3日（月）から仮設の建物で閲覧業務を行う。学生の勉学には支障を来さないよう冷暖房装置を設置して対応した。平成5年7月5日図書館が竣工した。

#### 他の部署による図書館書庫の使用

昭和59年11月1日、出版部の申し出により図書館新書庫の一区画を倉庫としてしたい旨の申し出があり、坂本夏男図書館長と真弓常忠出版部長との間で覚え書きが取り交わされた。

千束屋では、常設の芝居小屋での歌舞伎や地芝居の上演のため、衣装・鬘など上演に必要な用品を貸出していた。その千束屋資料については、昭和58年から調査が行われ、昭和61年7月現当主山田幸輝氏の御好意により全資料が本学に寄託されることになった。同年8月6日図書館の一部に保管され、平成3年3月26日神道博物館で保管のため搬出された。

#### 4、平成10年社会福祉学部に図書館が竣工

平成10年社会福祉学部が、三重県名張市に増設され2学部体制となった。学部増設に伴い、同名張市春日丘に図書館が新築された。鉄筋コンクリート建て2階で総面積は1675平方メートルで、その蔵書冊数は18400冊であった。職員3名と臨時職員1名の計4名のスタッフで運営された。社会福祉に関するコレクションとして「社会福祉・社会情勢（Social Welfare And Conditions）1828～1996」500冊、「社会福祉（SOCIAL WELFARE）1911～1995」500冊を所蔵している。

建築確認申請にもとづく面積（社会福祉学部図書館）

室の部分	一室の面積	室数	面積
事務室	64.56	1	64.56
館長室	18.48	1	18.48
カウンター・事務室	20.96	1	20.96
作業コーナー	14.47	1	14.47
ロッカーコーナー	11.51	2	23.02
開架閲覧室	252.18	1	252.18
閉架閲覧室	384.48	1	384.48
AVコーナー・ブラウジングコーナー	112.38	1	112.38
レファレンス	43.72	1	43.72
閉架書庫	92.77	1	92.77
対面朗読室	9.4	1	9.4
マイクロ室	22.63	1	22.63
グループ学習室	21.71	1	21.71
会議室	29.55	1	29.55
研究個室	3.77	5	18.85
研究個室	4.28	1	4.28
コピーコーナー	8.22	1	8.22
コピーコーナー	9.62	1	9.62
廊下など	523.34	1	523.34
計（登記申請面積）		24	1674.62

学舎間の相互貸借 文献複写・ILLの利用増大

館友への貸出、市民への開放により図書館として地域社会への貢献

平成13年堀内謹一氏から資料寄託の申し出があり、翌年「皇學館大学附属図書館寄贈及び寄託資料取扱要領」を定め平成14年6月1日から平成29年5月31日まで受け入れることになった。

「皇學館大学附属図書館資料受入審査意見書」に高倉一紀教授は次のように所見を記している。

資料の名称：堀内家伝来の書籍（五葉蔭文庫）

数 量：書籍等3000余点

そ の 他：

上記資料の受け入れについての所見は下記のとおりです。

上記資料は、江戸時代中期以来の素封家であり、蔵書家としても著名な飯高町堀内家伝来の一括資料である。また、幕末の同家は鈴屋の門流に属し、歌学派国学者長野主膳義言とも深交があった。従って、当家伝来資料は、江戸時代初期の奈良絵本、数種嫁入り本から国学者の自筆稿本類、転写本、更には主膳より当主等家人宛の書簡多数が含まれ、その図書館特殊コレクションとしての価値は極めて高いもの判断される。以上の所見により本資料受け入れは妥当と思われる。

平成15年3月28日預かり証を発行し、正式に受け入れられた。

平成15年4月から、社会福祉学部日高敦夫教授が図書館長に就任した。

平成16年夏、平成5年図書館建築の際から希望してきた図書館入口のドアが自動ドアに付け替えられた。11年目にして念願が叶えられた。平成16年度には、大学再興当時から希望してきた名古屋大学に移管された神宮皇學館大学文庫のマイクロフィルム化する事業計画が立てられた。文部科学省の私立大学等研究設備整備費等補助金（私立大学等研究設備等整備費）を受けて1,619冊について実施された。その後、大学の費用で36冊を製本し現在1,655冊となっている。選択は、『名古屋大学蔵書目録古書の部第1集 神宮皇學館文庫』（昭和37年3月発行）の中から明治以前の和装本で、本学に所蔵していないもので見積書を提出する都合から頁数がわかっている図書に限定した。大半は、国文学研究資料館にマイクロフィルムが保存されており、それからマイクロフィルムの複製を行い紙焼きをした。国文学研究資料館にマイクロフィルムを所蔵していない分を名古屋大学図書館でマイクロフィルム化と紙焼きをした。製本は、ナカバヤシに全面的に依頼した。

日高教授は、平成17年3月31日をもって停年退職されたので、平成17年4月から同じく社会福祉学部高島昌二教授が図書館長に就任された。

歴代の図書館長は以下の通りである。

年度	館長名	年度	館長名
昭和37年4月	田中 卓	昭和62年4月	宗林 正人
昭和38年4月	西内 雅	平成3年4月	白米 満行
昭和39年4月	西宮 一民	平成7年4月	長谷川明紀
昭和40年1月	佐藤 通次	平成9年4月	宗林 正人
昭和42年1月	谷 省吾	平成11年4月	野村 茂夫
昭和48年4月	藤本 利治	平成15年4月	日高 敦夫
昭和50年4月	西宮 一民	平成17年4月	高島 昌二
昭和54年4月	藤本 利治	平成19年4月	渡辺 寛
昭和58年4月	坂本 夏男	平成21年4月	高倉 一紀

寄贈図書によっても蔵書が特色付けられている。

昭和40年8月市内古市町の前田譲氏のご遺族から演劇関係を中心に文学書等2463冊が寄贈された。千田憲先生は、『松籟先生遺文』（千田先生を追悼する会編、昭和50年8月）の中で、「古市の前田さんのお宅というのは、私の熊本第五高等学校の生徒時代の友人、前田穰君の家である。前田は鉄道省の建設局長を勤め、退官後、三重交通の社長、参議院議員となり、皇學館大学復興の初代会長となり、皇學館復興のために尽力してくれたのであるが、惜しくも十余年前、他界した。（中略）彼の蔵書（文学書が多く、演劇関係のもの、雑誌類）の全部が、未亡人から、皇學館大学の附属図書館に寄贈せられた。その時、私は二度ほど未亡人を、古市のお宅に訪問して、図書寄贈の御好意に対して、厚く御礼を申したのである。」と前田家からの寄贈の経緯について記されている。

千束屋に伝えられてきた図書は、六代目山田長好氏の御好意により昭和39年7月寄贈の申し出を受け、同年9月5日本学図書館に搬入した。前館長西宮一民教授は、昭和39年館長に就任した時代の思い出として「図らずも伊勢市の素封家から夥しい図書の寄贈を受け、館長以下リヤカーを何度も曳いた記憶が蘇ってくる」と「全学一体」の創刊号（昭和50年4月）に記している。

昭和49年3月、当時本学学事顧問であった平泉澄博士から本学図書館に蔵書の一部を寄贈された。そのうち、主として明治初期までに書写あるいは刊行されたものに就いて、国史学科教員によって『平泉澄博士寄贈本略解題』（昭和49年9月）を作成し、博士への感謝の微意を表わすとともに、利用者の参考に供することにした。

外山利雄氏は、明治42年4月神宮皇學館本科に入学し、大正2年3月に卒業した。昭和15年4月49歳の時外務省文書課史学館に勤務し、昭和38年11月1日73歳退職した。その様な関係から、外交関係史料中心とし566冊が寄贈された。

第7代本学学長であった大庭脩教授は、平成14年11月27日（水）学長在任中急逝された。平成15年9月ご遺族から先生の御蔵書を寄贈したいとの申し出があり、目録（843冊）が作成された。平成16年度整理を開始し、整理をした結果、実際には約5000冊にも及ぶ膨大な蔵書で、中国の木簡関係書を中心とした幅広い中国関係書、中国関係史など幅広い分野に涉っており、本学の図書館にとって貴重な書物が数多くある。

## 5、平成18年から24年度図書館の動向

### 資料収集の充実

これまで古文書・古記録等で、本学の教育・研究に是非とも必要な資料であって、緊急に現物を確保すべき場合でも、予算的措置がなされておらず、購入・受入処理が出来なかった場合や、購入を希望しても申し出先や起案する部局などが不明確な状況であった。これらの状況を鑑み、伴五十嗣郎学長は、必要とされる資料の受入にあたり、どのような手順で今後行うのかのガイドラインを定め、よりスムーズな運用が図れる体制を立ち上げ、本学の教育・研究資源として、広汎な活用を実現するための検討する資料評価委員会（仮称）を設置したいとの趣旨から文学部長、神道研究所長、史料編纂所長、神道博物館長、文学部図書委員長、事務局長を招集して平成18年12月1日に意見を求めた。その後、教授会において協議がなされ、平成19年3月5日、常勤理事会において「稀観図書選定委員会設置の覚書」が制定され、平成19年4月1日からの施行されることになった。この覚書は、「古典籍・古文書・古記録等（以下「稀観資料」と略称）で、本学の教育・研究上、極めて資料的価値が高く、是非とも必要と認められ、しかも、緊急に現物確保の手配をしなければならない場合、学長経費より支出される稀観資料の購入に限定して適用する。」と学長経費からの支出に限定された内容となっている。稀観資料評価委員会は、学長、図書館長、事務局長、文学部図書課長、その他評価に適切な能力を有する者若干名で構成し、庶務を文学部図書館で行うことになった。（平成22年に文学部図書課長は、伊勢学舎図書館事務長、文学部図書館は伊勢学舎図書館に文言を訂正）

伊勢学舎図書館では、図書費の高騰や学生数の増加にもかかわらず平成12年度より図書予算は据え置かれたままであり、しかも明確な収書方針も立てられておらず、その上必ずしも体系的に収書がなされて来たとは言えなかった。殊に、本学の建学の精神の源泉となる神道および神社関係の資料においては、本来体系的かつ網羅的に収書されているべきところであるが、現状はその目標とはかけ離れたもので貧弱な状況であった。そこで、神道を中心とした日本文化関係資料を体系的に収集し蔵書構成において本学存立の根拠を固めたいとの意図で、予算的措置を講じるよう渡辺寛図書館長は、法人に要求をした。果たして、要求は認められ、平成20年度から5年間、毎年1000万円が予算として認められた。平成21年度から、「神道古典の写本・木版本の収集」を目的に、「① 国学者の著作の原本・

写本・木版本の収集、② 神宮・神社史（誌）の収集、③ 市町村史（誌）の収集」を目指す事にした。

平成20年度は、別表神社にある県史・市史を網羅的に収集する事にした。そのため、地方史の一覧をもとに入手した資料、未入手の資料を区別し、古書目録等を絶えず注意し入手する事に努めてきた。

平成22年度、高倉一紀図書館長は、「神道および神社関係資料の収集」とする収書の基本方針を定めた。その「収集対象」として、「① 古典籍（含近世版本）、古文書・古記録（含近世文書）を中心に、絵図・古地図、書画等の関連資料を含む。② 対象資料の出版・製作年の下限は、大正14年（1925）とする。出版・製作年が必ずしも明確でない場合は、推定大正14年以前を下限とする。」とした。

## 各学科・研究所等の遡及入力 財産の確定

各学科研究室および研究所等に図書が配架されて以来、毎年各学科・研究所等で整理し、管理され、会計課に冊数およびその受入金額が報告されてきた。しかしながら、必ずしも所蔵データもすべてが保存されておらず、また作成されたソフトもさることながらデータ形式も統一が図られていなかった。また、各学科研究室および研究所等が設置されて以来、蔵書点検も行われてこなかった。会計士からは財産の管理が適切ではないとの指摘や、各学科・研究所等において購入図書の重複は予算執行上問題があるとの指摘もなされてきた。その様な現状から、図書館で一元的に図書のデータを管理し、欲しいとの意向が法人から伝えられた。

平成18年度から、各学科・研究所等の遡及入力を図書館の最重要課題として位置付けられ、図書館としては、業務目標として各学科・研究所等の図書データ入力に最大限の努力をはらう事になった。

平成18年、文学部教授会において図書の一元管理が「大学評議会報告」としてなされた席上、CALISシステム上の問題点や、書誌データの問題点などが指摘された。本学が、図書館の電算化事業を開始しようとした時、本学独自でパソコンから書誌事項をも入力してきた。その後、Japan-MARC や NII の書誌データを活用したものなど書誌データは、統一されていなかったのが現状であった。その後、NII の書誌データに置き換える作業もなされたが全てを処理するには到っていなかったため、その問題点を指摘されたのである。具体的に教授会での指摘された内容について議事録をもとに紹介しておきたい。平成18年度文学部第1回教授会（H18.4.3）で、「17、その他 ①各学科・研究所等の図書の受け入れについて」奥野文学部長の求めに応じて、中北事務部長が、3月29日高島図書館長・高倉教授・大竹事務局長・中北事務部長・文学部図書課長とで図書の受入について確認した内容を次のように説明している。「①予算配分、選書・発注、納品・受付・会計処理は、従来通りとするが、学科助手等が行っていたデータ管理を、18年度購入図書は図書館で行う。②配架・管理・利用については従来通りとする。③各学科・研究所等の図書の利用等については、18年度中に検討する。④図書の整理データは、国立情報学研究所のデータを使用するが、現システムや取り込む情報は18年度中に図書委員会等で検討する。」更に、奥野文学部長の求めにより高倉教授が次のように報告を行った。

「一元管理というと、図書の管理まで含むことになるので、図書館、各研究所、各学科の書誌データの標準化とを考えてもらいたい。資産管理の問題から図書の一元化という面が出てきたと思われる。書誌データの標準化を行うと、それ以降考えられる、図書の有効活用、学生サービス、学科図書のあり方等今後充分検討していかなければならない。図書館そのもののあり方も今後十分検討していかなければならない。」その報告に対して、奥野文学部長は、今、教授会は報告を受けたに留める。今後検討を加え、必要に応じて審議事項として方向を決めるとの発言をし、この問題を一端終了した。

平成18年度文学部第2回教授会（H18.4.19）で、「10、その他 ①各学科・研究所等の図書の受け入れについて」として奥野文学部長から、学科等図書の購入手続きについて

「前回の教授会で報告事項として報告した内容にしたがって実施するとの共通認識をえたと考えるが、今回改めて審議事項として、内容は同様であるが提案したい」「今後は、図書委員会で諸般の問題について検討し教授会で審議を進めていくことも確認したい。」との発言があり、特に質問・意見もなく了承された。高倉教授からは、この問題は「文学部だけではなく、社会福祉学部も含めた全学的な組織で、書誌データについて、検討を加えていくべきである」との提案がなされた。

その様な、教授会での動向を受け、図書館では平成18年5月10日（水）高倉教授の出席を求め、現CALISの書誌データ項目一覧を示して説明を行った。現CALISの書誌データ項目と、NIIのデータとを比較検討してされたが、特に書誌データ上において欠落している項目の指摘もなかった。図書館が従来から行ってきた書誌データ作成で問題ないことが確認された。また、今度各学科・研究所等の新規受入図書について書誌データ入力を行うについて問題ないが、文学部教授会で書誌データ作成については、奥野文学部長が、「図書館長に両学部で検討する委員会を立ち上げそこで検討してもらうことになっているので、結論が出されるまで進めない方がよい」とのことで、一旦保留となった。5月17日（水）奥野文学部長より高島図書館長にその旨が伝えられ、検討の要請がなされた。それを受けて、5月29日（月）高島図書館長と高倉教授とで話し合いが行われた。その後、高倉教授との会談（5月31日）の中で、高倉教授が今回の会議で審議すべき内容として指摘があった事項は下記の通りである。

「Ⅰ、図書の一元管理の問題が議論され各学科・研究所等の図書の管理運営、事務助手などの人的な配置、システムの問題、各学科・研究所等の週及入力をする際の書誌データの標準化の問題からも検討すること。

Ⅱ、当面の問題としては、今年度予算に各学科・研究所等の週及入力の事業が認められており、2次的問題であるが「書誌データの標準化」の問題から検討を行う。

書誌データを標準化しその書誌データを一元管理する意義を確認しておく。

Ⅲ、CALISシステムにNIIから書誌データ項目を取り込んでいるが、はたして必要とされる書誌データ項目がすべて取り込まれているか。

（資料）CALIS上での書誌のタグとNIIのタグとの比較出来る表を作成

Ⅳ、「図書資料の一括管理」

書誌データ標準化（標準化の意味「種類・規格を標準に従って統一すること」）としては、

① 大学に所蔵するすべての図書の検索を可能にできるよう、書誌データの精度をUPし、それらの図書の有効的活用を図る。

② WebCatへのデータ提供を行う事。 」

5月31日（水）、委員会メンバーとして文学部からは高倉教授より外山教授が推薦され図書館長に報告。社会福祉学部では、教授会で社会福祉学部長より人選の依頼をし、筒井先生の推薦の承諾を取り付けることになった。奥野文学部長から、教授会で外山教授を選出することの承諾を取り付けてもらうことになり、6月1日（木）高倉教授にこの旨報告。委員会において書誌データについて検討を行う事になった。

書誌の標準化する目的は、国家レベルで作成された書誌データ（NII・Japan-Marcなど）を標準装備して、他大学と比較しても劣らない検索を可能として、利用の便を図ることにある。しかしながら、過去に作成された書誌データはさておき、現状では既にNIIのデータをもとに書誌データは作成され

ており、図書館システムもNIIのフォーマットになっていることから、敢えて委員会を開催するまでもないとの事で高倉教授の了解のもと、日常業務での書誌データ作成を進める事になった。

遡及入力は、平成18年4月24日より開始し、平成20年11月25日終了した。

	遡及入力前図書		CARIN上総計		差 異	
	冊 数	金 額	合計冊数	合計金額	冊 数	金 額
神 道 学 科	2,458	22,243,875	2,879	24,452,283	421	2,208,408
国 文 学 科	5,887	34,227,189	5,748	34,905,160	-139	677,971
国 史 学 科	4,468	46,258,886	4,908	43,323,448	440	-2,935,438
コ ミ 学 科	3,731	17,108,033	3,315	14,480,506	-416	-2,627,527
教 育 学 科	15,100	57,779,331	12,022	42,847,477	-3,078	-14,931,854
神道研究所	16,800	51,996,977	15,887	46,475,714	-913	-5,521,263
神道博物館	3,990	10,520,877	3,753	8,222,399	-237	-2,298,478
史料編纂所	9,989	60,757,963	10,621	50,411,117	632	-10,346,846
合 計	62,423	300,893,131	59,133	265,118,104	-3,290	-35,775,027

## 図書館システムの更新CALIN

平成4年からコンピュータ導入にむけて検討し当時パッケージソフトではなく、本学のシステムに合わせてコンピュータ化が図れることからCALISが導入された。しかしながら、ハードのリプレースはしたものの、ソフトは必要に応じて変更を加えたに止めた。

そのようなことから、現在のCALISでは、全文検索、旧漢字・新漢字を同時に検索できる対応になっていない。また、ハングル文字・中国の簡体字にも対応ができていない等の問題点を抱えていた。

CALISの後継機であるCALINは、それらの問題点についてはすべてクリアしており、システムのメーカーが異なったため、既存の書誌・所蔵データをコンバートする際のトラブルが発生したとする他大学の事例が報告されていたが、CALISに登録された書誌・所蔵データは問題なくコンバートできるというメリットがあった。

平成20年6月4日（水）午後1時～2時「平成20年度第1回図書館システム選定委員会」を伊勢学舎大会議室・名張学舎小会議室A203においてテレビ会議で開催した。（出席者：渡辺図書館長、高倉教授、松岡情報処理センター長、吉崎事務長、坂本事務長、山際（記録）欠席者：山上教授（委任状）、大竹事務局長（委任状）、前田情報課長）

「図書館システム選定」について、次の内容で協議がなされた。

渡辺図書館長より、図書館システムの更新について、昨年度法人に予算要求し、今年度承認された旨が報告され、これまで機種選定にあたりどの様に検討してきたのか、説明が求められた。それに対し、事務局から、これまで本学の図書館システムについて、資料をもとにこれまで検討してきた各種図書館システムについての概要を説明した。その上で、各、図書館システムメーカーのシステムを検討した結果、本学の蔵書規模、現在のスタッフの問題、打ち合わせを含めた導入までの期間などを考慮し、丸善（CARIN）他3社に絞り込みをしたと説明し、ネットワーク等の問題については、図書館、情報課それに業者を交え打合せを行いたいと説明した。

現在まで構築してきた書誌データの形式は幾種類もあるが、新システム上で構築して問題はないか

との質問がだされたが、書誌構造での問題はないと説明がなされた。3社のシステムを検討する際、各社のシステム上のメリット、デメリットを検討し、システムのサポート体制や書誌データの移行の問題等を比較した上で、次期図書館システムにCARINシステムを選定する事が諮られ、異義なく了承された。

### キャンパス統合計画 図書館3階の改築計画

名張学舎とのキャンパス統合に向け、キャンパス統合のためのプロジェクトを（事務局）を立ち上げ、平成21年5月29日（金）第1回の会議を開催し、以後、平成22年2月4日（木）まで都合11回の会議がもたれ検討がなされた。

#### 社会福祉学部との統合による蔵書の移転作業（所蔵データの付替作業等）

伊勢学舎図書館自体収納スペース限界が近付いている中で、社会福祉学図書館の蔵書を受け入れることができるかの検討がなされた。従来、図書の大きさによって棚板の高さを変えて配架していたが、棚板の高さを統一し7段に収納することにした。どうしても高さのある図書については、書棚の最下段を高さを高く取りそこに別置することにし収納スペースを拡大を図った。平成22年夏期の蔵書点検時に、空き棚数を計算したところ社会福祉学部図書館の蔵書の収納は計算上可能となった。しかし、今後増加する蔵書まで収納する事ができないため、「皇學館大学・高等学校・中学校図書館資料の除籍に関する内規」（平成21年6月5日施行）に照らし、①利用頻度の低い複本、②記述されている内容・資料・表記等が古くなり利用価値の失われた資料、③新しい学説や理論が採用されていない資料で、史的資料としても利用価値の失われた資料については、極力廃棄することにした。平成22年7月5日（月）から7月30日（金）洋書及び製本雑誌について仕分け作業と伊勢学舎図書館への搬出作業を行い、8月2日（月）名張学舎図書館から搬出し8月3日（火）伊勢学舎図書館での受入作業を開始し8月10日（火）配架を完了した。

名張学舎図書館では、9月6日（月）から9月10日（金）にかけて①伊勢学舎図書館移送図書のリスト、②除籍図書リスト、③名張市無償譲渡（予定）リストを作成した。移転する図書については、伊勢学舎図書館と仕様を合わせるため図書のラベルの貼り替え作業も実施した。和書及び製本雑誌（48,798冊）について平成23年2月21日（月）・22日（火）名張学舎図書館から搬出し、伊勢学舎図書館に搬入し、配架作業及びその点検作業を順次進め3月3日（木）作業を完了した。名張学舎図書館からの受け入れされた図書が混配されたため配架場所が大幅に変更となったため、利用者への便を考え、書架への見出しや配架場所変更等こまめに掲示を行い、3月7日（月）開館した。

名張学舎図書館から移転してきた図書について、配架場所の変更、新たに設置したビデオ・DVD用書架への配架変更、除籍図書のデータ変更等を丸善（株）に依頼して平成22年3月4日（金）行った。

### 新たな事業への取組み

#### 図書館の閲覧環境の改善と安全対策

地震災害の対応については、従来から検討がなされ安全対策について提言し、予算要求をしてきた。平成23年3月11日、東日本大震災が発生したこともあり、①、閲覧室2階・3階の耐震工事（傾斜スライド棚への付替、書架の床固定）、②、積層書庫の照明器具増設と非常灯の設置・非常誘導灯の付替工事が認められた。

平成23年8月1日から11日（水）まで、積層書庫の照明器具増設・非常灯の設置、避難誘導灯の取替工事。集密書庫の非常灯・避難誘導灯の設置工事を行った。

この照明器具関係工事とは別に、8月8日（月）から19日（金）まで閲覧室2階・3階の書架の床固定工事ならびに傾斜棚取替工事を実施した。今後は、積層書庫・集密書庫についても傾斜棚取替など耐震工事を実施しなければならない。

#### 閲覧室3階の改修工事 書架及び閲覧席の増設

従来から、文学部図書館では書庫の狭隘が問題化されてきたにも拘わらず、平成23年3月末には、社会福祉学部から52,618冊の蔵書を受入が移転された。書架の棚板の高さを一定化することにより何とか工夫を重ね社会福祉学部の蔵書を受け入れることは出来た。しかしながら、書棚の空きスペースは限界に達しており、平成24年8月、大学院の研究室・演習室が3号館に移転、8月20日（月）から3階の閲覧室の拡張工事（伊藤工務店）を行い、9月17日から社会福祉学部から移転してきた書架を組立（丸善株式会社）、約22,000冊の蔵書を取納出来るようになった。また、かねてより快適な環境のもとでの座席数の確保の要望にも対応した。社会福祉学部図書館から移転してきた閲覧机及び椅子を利用して48席を新たに設けるとともに、3階閲覧室に新たに資料検索用のパソコン4台を設置、パソコン利用のためコンセントの増設、トイレの使用も可能となった。

#### 将来への構想

平成23年12月16日付で、附属図書館在り方検討委員会高倉一紀委員長から、教学運営委員会委員長清水潔学長に「附属図書館改革に関する提言」が答申された。その中で、教育・研究支援機能として、早急に取り組まなければ課題として「ラーニング、コモنزの開設とサブジェクトライブラリアンの任用」を取り上げられた。その他として、早急に取り組まなければならない課題に「本学の特色を活かした戦略的な稀観資料の収集と活用」があるとし、その一として「資料のデジタル化」が指摘された。

資料のデジタル化は、大学に所蔵する資料を保存し、デジタル化した資料をもとに、広く地域の方々に資料を提供することは、大学をアピールすることにもつながる。将来は、補助金を申請（補助金対象になるか調査する）してデジタルライブラリーとしてホームページへの掲載をしたいが、そのような、足がかりとして、来年度はその第一歩を踏み出したいと、第1回大学図書委員会（平成21年10月14日（水））に提案し審議された。図書委員会では、伊勢学舎の所蔵する貴重資料のデジタル化により手軽に資料を提供することは、地域社会への貢献のみならず大学の宣伝にもなり、受験生獲得にもつながる事業であり、積極的に進めていくことで合意がなされた。

その他「リポジトリの構築」などの課題が提示され、今後、それらの諸問題を解決していくことにより次世代に対応できる図書館となり得るであろう。

平成26年、文部科学省の補助金をもとに3月末ラーニング、コモنزの開設することができた。今後、教育・研究に有効的に活用されることになる。

（平成26年3月31日）

【編集担当者附記】本稿は、『皇學館大學百三十年史』各説篇に掲載のため準備された原稿であるが、同書の刊行を見送ることになったためここに掲載させていただいた。

（よしざき ひさし・前皇學館大学附属図書館事務長）